

『神への愛のある・なし』 ヨハネ5:39-47

- 5:39 あなたがたは、聖書の中に永遠の命があると思って調べているが、この聖書は、わたしについてあかしをするものである。
- 5:40 しかも、あなたがたは、命を得るためにわたしのもとにこようともしない。
- 5:41 わたしは人からの誉を受けることはしない。
- 5:42 しかし、あなたがたのうちには神を愛する愛がないことを知っている。
- 5:43 わたしは父の名によってきたのに、あなたがたはわたしを受けいれない。もし、ほかの人が彼自身の名によって来るならば、その人を受けいれるのであろう。
- 5:44 互に誉を受けながら、ただひとりの神からの誉を求めようとしないあなたがたは、どうして信じることができようか。
- 5:45 わたしがあなたがたのことを父に訴えると、考えてはいけない。あなたがたを訴える者は、あなたがたが頼みとしているモーセその人である。
- 5:46 もし、あなたがたがモーセを信じたならば、わたしをも信じたであらう。モーセは、わたしについて書いたのである。
- 5:47 しかし、モーセの書いたものを信じないならば、どうしてわたしの言葉を信じるだろうか」。

●序論

先日、阪神タイガースが優勝で話題になったワード、「アレ」。それは阪神の優勝を指し示していました。言葉が描くビジョンと不思議なけん引力を見たように思います。さて、先週の礼拝の三つ目のポイントで、聖書が指し示すものは何か？「この聖書は、わたしについてあかしをするものである」と。しかしその続く言葉は「それなのにあなたたちは命を得るために私のところへ来ようとしない」というものでした。

●本論

I. イエスさまのもとに行こう

イエスさまは、はっきり言われました。

「それなのにあなたたちは命を得るために私のところへ来ようとしない」(新共同訳)と。

ユダヤ人たちが聖書の中に探し求めていたのは「永遠のいのち」でした。

それは滅びゆく運命からの救い、神さまとの関係を回復し、死後にも神さまとの間に安息を得ることの確信と書いていいかもしれません。

あの金持ちの青年の物語を思い起こしてください

彼はイエスさまのもとに走り寄りひざまずいて尋ねました。

「善い先生、永遠の命を受け継ぐには、何をすればよいでしょうか」(マルコ10:17)

彼もまた「永遠の命」を求める人で、彼自身は聖書に記されていることはすべて守りつくした、けれどもまだ永遠の命を見いだせていない、その確信が得られない…と、イエスさまのもとに来たのです。

すごい、この人はイエスさまのもとに来たではないか！？
けれどもその出会いの最後にはこうあります。

その人は、…悲しみながら立ち去った」(同:22)とあるのです。
彼が求めたのはイエス様ご自身ではありませんでした。

自分が何をすればよいか？どうすれば、どこまですれば神さまに認めさせることができるか？ということでした。

だからイエスさまの言葉に憂いを思います。

同:21 イエスは彼に目をとめ、いつくしんで言われた、「あなたに足りないことが一つある。帰って、持っているものをみな売り払って、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に宝を持つようになるだろう。そして、わたしに従ってきなさい」。

先日天に召された大村邦雄兄は見た目に多くの物を持っていたわけではありません。しかし彼はだれよりも多くを持っていた。

この地上では、お金で買えない家族の愛。そして天においてはイエスさまが言われたとおりです。「天に宝を持つ」者でした。なぜなら、イエスさまに従うことを大切にされたからです。

イエスさまのもとに行こう。そういうシンプルな歩みに生きた人だったのです。

Ⅱ. 神の栄誉を求めよう

:41 わたしは人からの誉を受けることはしない。

ある人々は熱狂的にイエスさまを、この地上の王として祭り上げようとしていました。

けれども、イエスさまはそのような誉れは受けませんでした。

イエスさまは、ただ父なる神からの栄誉を求めていたからです。

一方でユダヤ人たちは、人に、そして神さまに自分を認めさせようという思いをもって律法をその道具としていました。そんな彼らにイエスさまは言われました。

:44 互に誉を受けながら、ただひとりの神からの誉を求めようとするあなたたちは、どうして信じることができようか。

これは意味深い言葉であり、また事実となりました。

ヨハネ12:42-43

:42 しかし、役人たちの中にも、イエスを信じた者が多かったが、パリサイ人はばかかって、告白はしなかった。会堂から追い出されるのを恐れていたのである。

:43 彼らは神のほまれよりも、人のほまれを好んだからである。

しかしイエスさまは違ったのです。イエスさまがその生涯で目指した「あれ」、つまり神からの栄誉、それはわたしたちの身代わりとなって死ぬことでした。

それが父なる神の御心であったからです。

ですから、はっきり申し上げます。神さまからの栄誉は、この世の栄誉、人からの栄誉とは明らかに異なります。そして対立します。

かつてサタンは、イエスさまを誘惑しました。

マタイ4:8-10 悪魔の誘惑の三つ目

:8 次に悪魔は、イエスを非常に高い山に連れて行き、この世のすべての国々とその栄華とを見せて

:9 言った、「もしあなたが、ひれ伏してわたしを拝むなら、これらのものを皆あなたにあげましょう」。

:10 するとイエスは彼に言われた、「サタンよ、退け。『主なるあなたの神を拝し、ただ神にのみ仕えよ』と書いてある」。

イエスさまが主張した栄誉は、父なる神にのみ仕えることでした。

そうしてイエスさまは神さまからの栄誉を受けたのです。

ピリピ2:8-9

:8 (イエスさまは)おのれを低くして、死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従順であられた。

:9 それゆえに、神は彼を高く引き上げ、すべての名にまさる名を彼に賜わった。わたしたちにも、何よりも神さまからの栄誉を求める者とのチャレンジがあるのです。

マルコ8:34

それから群衆を弟子たちと一緒に呼び寄せて、彼らに言われた、「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負って、わたしに従ってきなさい。

従うのであれば、イエスさまから目を離してはなりませんね。

Ⅲ. 神を愛する者となろう

イエスさまははっきり言われました。

5:42 しかし、あなたがたのうちには神を愛する愛がないことを知っている。ここでは「神を愛する愛がない」と言われると、思わず心に浮かぶ反応は、「いったい、わたしに何ができていないというのか!？」という思いが走ることもあるでしょう。

でも全く違うのです。

まことの神さまと間で、わたしたちが神さまを愛するということは、決して神さまに対して何かができる、してあげれる、ということではないのです。

むしろ、神さまに目を向け、心を開いて、神がくださった恵みを信じて、「アーメン」と受け取ること、それが神さまへの愛、神さまに心を向ける信仰なのです。

ですからこう記されています。

5:42 しかし、あなたがたのうちには神を愛する愛がないことを知っている。

5:43 わたしは父の名によってきたのに、あなたがたはわたしを受け入れない。

...

○最後に

:45 わたしがあなたがたのことを父に訴えると、考えてはいけない。あなたがたを訴える者は、あなたがたが頼みとしているモーセその人である。

彼が指し示す「あれ」こそ、キリストであり、イエスさまそのお方であることを、イエスさまは語られたのです。

:46 もし、あなたがたがモーセを信じたならば、わたしをも信じたであろう。

モーセは、わたしについて書いたのである。

:47 しかし、モーセの書いたものを信じないならば、どうしてわたしの言葉を信じるだろうか」。

モーセの書を通して指し示される救世主キリストを見ようとせず、自分の出来不出来で、自分を認めさせようとするように律法主義で生きている限り、聖書はわかることはない。永遠の命を得られたという確信はない。それが今日語られるところです。ですから、あらためて今週もコリント第二の手紙を読みます。

2コリント3:14 実際、彼らの思いは鈍くなっていた。今日に至るまで、彼らが古い契約を朗読する場合、その同じおおいが取り去られないままで残っている。それは、キリストにあってはじめて取り除かれるのである。

これはかつてパリサイ派の一人として律法を厳格に守り、それゆえキリストの福音に敵対し迫害してきたパウロの言葉です。

そして事実、彼は復活のキリストとの出会いを経験して、彼の目はまさに「目からうろこが落ちる」経験をしたのです。

同3:16 しかし主に向く時には、そのおおいは取り除かれる。

たくさんの学びを経た人だから…、どれだけ聖書をたくさん暗記しているから…、でもありません。それはかつてのパウロでした。しかし彼が本当の意味で聖書に目が開かれたのは、キリストと出会ったからです。

あの律法学者たちのようにではなく、ただ神さまに愛されて、神さまを愛するように心が開かれたのです。

これこそ救いだと覚えていただければ感謝です。